

2017年度ELEC英語教育賞授与式・特別講演

2018年3月17日

｜特別講演会（法政大学 田中優子総長）

英語教育の専門家の方々の前で日本のこととお話するのは私にとって初めてですが、とても大事なことと思っております。このような機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

ご紹介いただきましたように、法政大学はスーパーグローバル大学ですが、大学のグローバル化を1970年代から既に始めておりました。私は日本文化を研究する立場として、グローバルとは何なのかということに、いつも突き当たっております。本日はそのあたりのこととお話させていただきたいと思います。

本日の講演のタイトル「あなたは英語で何を伝える？」について少々ご説明いたします。海外留学をする学生が減少する中、法政大学では留学する学生が増えているのですが、彼らの目的の1つは英語を話せるようになりたい、上達したいということです。では、英語の力がついたときに、何を話すのか。プレゼンテーションやディベートなど、様々な方法が実践されていて、大学に限らず、いろいろなところで導入されていますが、そこで何を話すのか。日常のことでいいと思いますし、オリンピックが近づいてくると、日本食や着物など、日本らしさについて紹介する機会が増えるわけですが、断片的な説明でいいのかということも疑問に思えてきます。そこで今日は、皆さんに課題を投げかける気持ちでお話をさせていただきたいと思います。

まず、グローバリゼーションへの日本の対応の歴史についてお話させていただきます。明治維新がグローバリゼーションへの対応であることはご存じのことと思いますが、ヨーロッパ諸国に準拠して国をつくり直すという時代でした（第二次グローバリゼーション）。また、敗戦後もアメリカに準拠して国をつくり直す時代（第三次グローバリゼーション）でしたが、私は、専門である江戸時代を第一次グローバリゼーションの時代と呼んでいます。なぜかといいますと、グローバリゼーションがなければ江戸時代は存在しなかったからです。世界のグローバリゼーションの結果として、江戸時代が出現したのです。世界のグローバリゼーションに対応しなければならなかったからなのです。ただし、このときには準拠する国はありませんでした。基本的には中国の政治思想を使っていますが、そこに依存していたわけではありません。そこが大変重要なところです。

そして今、第四次グローバリゼーションと呼んでいいと思いますが、今までとは全く違う時代が来たと私は感じています。例えば大学1つ取り上げてみても、日本の大学はどこかの大学に似た大学になるのではなく、日本が積み上げてきたものを使いながら、独自の対応ができるはずだと思っています。なぜそう思うのかというと、江戸時代がそれをやったからなのです。

江戸時代がなぜグローバリゼーションの時代なのかということをお話ししておきます。グローバリゼーションとは最終的に太平洋が結ばれたことなのです。古代から往来の経路としてシルクロードなどさまざまな行き来があったのですが、途切れていたのは太平洋です。アメリカ大陸が発見された段階ではまだ大西洋までしか結ばれていなかったのです。その後メキシコのアカプルコ港から、スペインのガレオン船が大量の銀を積んで、フィリピンのマニラ港に行きました。ここで初めて太平洋が結ばれ、グローバリゼーションが完成します。こうやって地球全体が結ばれたわけです。

このように、16世紀という時代は大変重要な時代なのです。この後、非常に激しい植民地争奪戦が起こるわけです。日本は、このことで大変大きな影響を受けます。コロンブスの一行が、アメリカ大陸に来た時に、いくつかの島に上陸するわけなのですが、そこを日本だと思い、あるいは日本を探すのです。なぜかということ、日本に行きたかったからなのです。それはコロンブスの航海記に書いてあります。そのようなことがまず1つある。でも、そのこと自体は日本に影響を及ぼしません。問題なのは、マニラの港に積んできた銀なのです。日本は当時、鉱物資源が大変豊かな国で、主に銀を中国に輸出して、さまざまな物資を中国や東南アジアから輸入していました。

中国やインド、東南アジア、特に中国は生糸、絹織物、陶磁器、生薬など、世界最高レベルの様々な技術製品を持っていました。それらを買って、日本は鉱物資源（銀）で支払っているわけです。日本は、そういう技術を持たない国で、鉱物資源しか持っていなかったと言っていいと思います。例外としては、日本刀や、和紙が輸出されていた程度です。銀が国際経済の根幹であった日本にアメリカの銀が入ってきたために、アジアにおける日本の競争力がなくなったのです。

学校で日本史を教える中で、江戸時代ができたのは関ヶ原の合戦があったからだという因果関係で説明されるのですが、現実には、実際の生活や経済、特に国際的な経済の流れの中で、1つの国が変わっていかざるを得なくなるというのが、私たちの常識に合わせても、よく理解できるところです。

日本は変化していかなければならなかったのですが、江戸時代はどんなふうにグローバル化を迎えたのか。1560年代に完成したグローバリゼーションに対応し、周辺諸国との外交関係、ヨーロッパとの通商関係を樹立し、世界中の情報を得て、輸入依存から国産技術へ転換し、独自のものづくり日本を創造した時代、これが江戸時代です。

グローバリゼーションの中の江戸時代は、世界経済の動き、アジアと連動した変化が起きました。大航海時代が始まり、日本の経済的窮地が起こる。そしてそれまでの拡大主義や、内戦(戦国時代のこと)、鉱物依存、輸入依存から脱却しなければならなくなりました。そうすると、相対として価値観の転換が必要になり、現実に行ったのが江戸時代です。ものづくり日本を創造し、約270年間、内外との戦争を起こさないと決断してそのための参勤交代という政策を行い、朝鮮王国、琉球国、アイヌ民族、そしてオランダ東インド会社と外交関係を打ち立てました。

このような背景の中で、アジアの繊維産業、農業、陶磁器、薬学を学んで国産化し、アジアやヨーロッパの機器類を導入し、時計や鉄砲、レンズ製品、活字印刷など独自技術を育てていったのです。

今まで駆け足で江戸時代についてお話してきましたが、ここで日本の文化や歴史が共通した問題、仮題やテーマ、特徴を持っているかどうかについて議論していこうと思います。

先ほど、江戸時代をどう見るかと言うことで、今まで教科書的に言われた「鎖国」という言葉とは違う話を私にしたのですが、教科書でどんな言葉を使って子どもたちに話すかでその時代の印象は全く変わってしまいます。「鎖国」という言葉は、江戸時代には存在しませんでした。「鎖国令」という法令がなかったからです。ところがその後、ケンペルという人が書いた本の翻訳語として「鎖国」という言葉を使って表現するようになりました。江戸時代は鎖国していたから今度は開国だ、明治以降、開国と言うために鎖国と言わなければならないということで使われるようになりました。

さらに戦後、その傾向が強くなり、日本が負けたのは鎖国していたからだと言うようになりました。それが「鎖国—日本の悲劇」という言葉であらわされるようになったのです。このように、歴史的な事実でないにもかかわらず、教科書の中に鎖国という言葉が定着してしまい、ようやくちかごろ、「いわゆる鎖国」と、あいまいな表現になりました。

もう1つ大事なことは、例えば和食や着物などの表面的な事象だけでは日本文化を説明することはできないのではないかということです。日本文化がどのような特徴を持っているのか、つまり構造を理解することがとても大事です。このように申し上げるのには、私

自身の実体験があるからなのです。私は大学に入るまで、江戸時代に全く関心がありませんでした。近代文学を専攻し、物書きになるつもりで法政大学の日本文学科に入り、素晴らしい教育を受けました。昭和文学をやっているときに、石川淳という芥川賞作家の『江戸人の発想法について』という短いエッセーを読み、大変な衝撃を受けました。まさに題名のとおり、江戸人の発想法とはこうだったと書いてあるだけでしたが、江戸時代についてほとんど何も知らない私がそれを読んだ途端に、ああ、こういう構造だったのだ、発想法はこうだったのだと分かったのです。私はその後そのことが大変気になって、後追いでいく形で江戸時代の勉強を始めたのです。知識を一杯ため込むと何かが理解できるのかというところではなく、ある事柄について、その構造を納得したときに、何かが分かる。つまり、日本について、色々な現象をバラバラにお話ししても、外国の方に理解していただくのは難しい。これは言語の教育でも同じで、言語構造があって初めて言葉の教育ができるのと同じように、文化にも文化の構造というものがあって、初めて語ることができるのです。

昨年12月に出した『日本問答』の対談中で「デュアル」「おもかげ」「かたしろ」「述語」「連」「折りたたむ」などについて話しているのですが、その中の1つである「デュアル」についてお話しします。

「デュアル」について、対談の中ではデュアルスタンダードという言葉で説明しています。ダブルスタンダード、つまり二枚舌を使ってごまかそうという意味ではありません。文化の中、あるいは政治構造そのものが実際こうなっていたという話です。「漢と和」「神と仏」「天皇と将軍」「公家と武家」「顯と隠」「才と能」「見立てとやつし」「荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）」などをまず挙げておきます。

「漢と和」についてお話しします。皆さんご存じのように、『古事記』『日本書紀』『万葉集』は全て漢字で書かれています。例えば『万葉集』には万葉仮名という、見れば漢字ですが、読むときには日本語になっている不思議な文字を使っています。つまり日本語を音のまま表すために、漢字を経由して仮名を発明したのです。しかし何もかも仮名で行こうとはならない。それは、やはり思想や政治制度の根幹を中国に依拠していたからです。けれどもそこから、かなり早い時期に離れ始めている。その表れが仮名の発明で、ハングルやベトナムのチュノムという文字に比べても非常に早い表音文字の出現です。このように「漢と和」を切り離しながら二重化してきており、これが「デュアル」と言うことの1つの起源になるだろうと思います。

建築様式でもそれが表れます。例えば宮廷の中で政治を司る大極殿は瓦葺き、朱塗りで完全な漢風様式ですが、その屋にある紫宸殿、清涼殿などの生活の場は高床式で檜皮ぶきの和風の様式です。つまり1つの建物のなかで公のところは中国風で、私的なところは日本風にする、これも「デュアル」ということです。

「天皇と将軍」については、江戸時代の1つの大きな謎でした。将軍の世界があって、政治を将軍が完全に掌握しました。一度、家康の時代に、天皇には、伊勢にお帰りになってもらったという話が起ったのですが、将軍は天皇を輔弼してこそ将軍としての信頼を得られるのだという話になり、天皇は京都にとどまりました。江戸時代には天皇は京都にいて、京都が首都でした。江戸には将軍がただけで、天皇はいないわけです。この構造自体がデュアルで、二重性を帯びています。京都と江戸というのは、単に2つの都市というだけではないのです。天皇がいる場所と将軍がいる場所という、2つの中心があるわけです。この2つの中心を置いておくことによって、江戸時代体制ができ、後に天皇は東京に移りますが、それでもやはり、デュアルな体制は残ってきました。

近代の変化として教育の世界で言いますと、江戸時代には独自の学びの方法がありましたが、やはりヨーロッパのやり方を見習わなければという圧力が大変強かったわけです。アメリカ人の教師を招いて、欧米の教授方法を取り入れるということが行われた結果、全国で一斉教授方法が行われることになります。それで、それまで行われていた個別指導方法や共同読書方法が日本から消えていきました。今になって、いや、やはりディスカッションが大切、となりました。多くの学生を集めて、一方的に講義をするという形は、普及と言う意味では仕方がなかったと思います。多くの人がそれによって教育を受けることができ、義務教育制度も成立したのですが、今、ここに来て、それだけでよかったのかと私たちは考えているわけです。今までのやり方が悪かったということでもないのですが、では江戸時代のやり方はどうだったのかと見直したときに、ディスカッションをやっているのです。そういうようなことも、日本のやり方として考え直すことができます。

前述の「デュアル」も含めて、私たちがなかなか説明できない事柄を構造として整理して、多くの人が英語でも、日本語でも、構造として説明ができるように仕上げていくことがこれからは必要になってくると思います。どうもありがとうございました。(拍手)